

『生活文化研究所報告』第四十七号
二〇二〇年三月刊 別刷

末摘花物語と『白氏文集』「上陽白髮人」

岩原 真代

末摘花物語と『白氏文集』「上陽白髮人」

岩原真代

【要旨】

『源氏物語』「初音」巻、二条東院に引き取られた末摘花は、光源氏に対して唐衣詠を贈り、怨情を訴えるが、光源氏の訪問はない。末摘花の後半生は、経済的には潤い、生活環境も整うが、光源氏との婚姻関係は形式的であり、やがては唯一の美点であった長髪にも白髪が混ざる。本稿では、末摘花のこの老残の姿に、『白氏文集』「上陽白髮人」の引用を読み解く。物語中、当該詩の引用は、指喰いの女、六条御息所、光源氏、玉鬘の大君等の造型に確認されている。末摘花の場合も、古代の装束に加え、別邸で空閑を嘆きつつ老化するという、人物造型の構想全体に上陽人の辛苦の人生が投影されている。物語は末摘花の閨怨の情を語ることで、玉鬘を得て栄華を増す六条院体制が孕む影の部分照射していく。末摘花造型は、前半生においては、「葎の門の女」や「待つ女」という、物語の典型的な女性像の話題をもって縁どられてきたが、後半生は閨怨詩や宮怨詩の「恨む女」の系譜上に位置付けられる。

【キーワード】

末摘花、『白氏文集』「上陽白髮人」、二条東院、閨怨、恨む女

はじめに—二条東院の末摘花—

『源氏物語』「初音」巻には、光源氏の妻妾の一人として二条東院に住む、末摘花の老残の姿が語られる。

常陸の宮の御方は、人のほどあれば心苦しく思して、人目の飾りばかりはいとよくもてなしきこえたまふ。いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などをいとほしと思せば、まほにも向かひたまはず。柳はげにこそすさまじかりけれと見ゆるも、着なしたまへる人からなるべし。光もなく黒き搔練のさぬさぬしく張りたる一襲、さる織物の袿を着たまへる、いと寒げに心苦し。

(③一五三頁¹)

故常陸宮家の醜女末摘花は、「蓬生」巻での再会後、光源氏に引き取られ、二条東院に落ち着いたが、古宮家由来の生活様式は変えていない。また、古代の皮衣を兄の阿闍梨に取られたことを嘆き、光源氏を辟易させる。老いを加えたその姿は、唯一の美点とされた美しい長髪すらも、「白髪」を交えて見る影もない²。かつて、「蓬生」巻で、窮乏の危機的状況にあつても、古宮家の遺風を守り、不変不動の矜持を示して、宮家ならぬ光源氏世界を相対化した末摘花であるが、光源氏の庇護下においては、わずかに装束贈答に自己主張するものの、老残を極めていいる。

『源氏物語』は多くの女君の人生を語るが、末摘花の場合は人生の浮沈を繰り返す、高貴な宮家の女性の辛苦の姿が露骨に語られる点、特筆される。

末摘花造型に関しては、古注釈以来、多く引詩が検討され、『白氏文集』のみを見ても「北窓三友」「凶宅」「傷宅」「重賦」等の受容関係が検証されている³。また、末摘花の一貫した古宮家の女君としての姿勢には、呪

性や光源氏体制を相対化する極端な古宮文化の有様が検討されてきた⁴。本稿では、なお、末摘花の長年の辛苦に追い打ちをかける後半生のあり方に、『白氏文集』『上陽白髮人』の引用を確認し、物語における意義を考察する。

一、『源氏物語』と『白氏文集』『上陽白髮人』

『白氏文集』『上陽白髮人』の本文は次の通りである。

上陽白髮人〔愍怨曠也 天寶五載已後楊貴妃專寵後宮無復進幸矣。

六宮有美色者輒潛退之別所。上陽人是其一也。貞元中尚存焉也。〕

上陽人。紅顏暗老白髮新。綠衣監使守宮門。一閉上陽多少春。玄宗末歲初選入。々時十六今六十。同時採擇百餘人。零落年深殘此身。憶昔吞悲別親族。扶入車中不教哭。皆云入内必承恩。驗似芙蓉胸似玉。未容君得見面。已被楊妃遙側目。妬令潛配上陽宮。一生遂向空床宿。秋夜長。夜長無睡天不明。耿耿殘燈背壁影。蕭々暗雨打窓聲。春日遲。日遲獨坐天難暮。宮鸞百轉愁厭聞。梁燕雙栖老休妬。鸞歸燕至情悄然。春往秋來不記年。唯向深宮望明月。東西四五百迴圓。今日宮中年最老。天家遙賜尚書號。小頭鞋履窄衣裳。青黛畫眉々細長。外人不見見應笑。天寶年中時勢粧。上陽人苦最多。少亦苦老亦苦。少苦老苦兩如何。君不見昔時呂向美人賦。：又不見今日上陽白髮歌。(一五～一六頁)⁵

上陽人は、十六歳で玄宗皇帝の後宮に召されたが、その美貌を楊貴妃に疎まれ、上陽宮に幽閉された。四十四年後、六十歳で老女官として再度、参内した時には、時代錯誤の天寶年中の装いをした白髮の、見る影もない姿であった。全国から美女を召集する花鳥使制度を諷諭する詩であるが、その宮女の長年の辛苦に満ちた人生は、後世の文学に多く受容された。詩題にある「怨曠」とは、配偶者との疎遠を嘆く意とされる⁶。

「上陽白髮人」は『和漢朗詠集』『秋夜』にも所載されている。

秋夜長 秋の夜長し

夜長無眠天不明 夜長くして眠ること無ければ天も明けず

耿耿殘灯背壁影 耿耿たる残んの灯壁に背けたる影

蕭蕭暗雨打窓声 蕭蕭たる暗き雨窓を打つ声 上陽人 白

(一三二～一三三頁)

上陽人といえはこのように、主として憂愁を抱えた女性が壁に火影を映しながら窓に打ちつける雨音を聴く、というイメージである。『大鏡』(萩野本)には唐代の美貌の宮女達の不遇な生涯が列記される。

唐には、昔三千人の后おはしけれど、それは筋をたづねずして、ただかたちありなど聞こゆるを、隣の国まで選び召して、その中に楊貴妃ごときは、あまりときめきすぎて、悲しきことあり。王昭君は父の申すにたがひて胡の国の人となり、上陽人は楊貴妃にそばめられて、帝に見えたてまつらで、深き窓のうちにて、春の行き秋の過ぐることをも知らずして、十六にてまゐりて、六十までありき。かやうなれば、三千人のかひなし。(一三三頁)

ここでも、上陽人は、楊貴妃、王昭君とともに花鳥使制度の犠牲となった悲劇の宮女の列に位置付けられている。そして、上陽人に関しては、楊貴妃の嫉妬と離宮での歲月、それに伴う加齢の無惨が注目されている。

次に『源氏物語』における「上陽白髮人」の引用場面を確認する。当該詩の直接引用は、「帚木」巻の指喰いの女の妬心(①七五頁)、「賢木」巻の十六歳で入内したものの、前坊と死別し、内裏を退出した後、三十歳で再び参内した六条御息所像(②九三頁)、「幻」巻、紫の上の没後、哀傷に沈む光源氏像(④五三九頁)、そして、「竹河」巻の后がね大君の、入内後の后達の嫉妬心を懸念する場面(⑤六一頁)等に認められている⁷。これは、いずれも白詩の一節を用いて、苦悩の境遇を語っている。

末摘花造型と当該白詩の引用関係はすでに、「蓬生」巻の光源氏との再

会場面に指摘されている。

(源氏)「…数ふればよき積もりぬらむかし。都に变りにけることの多かりけるも、さまざまあはれになむ。いまのどかにぞ鄙の別れにおとろへし世の物語も聞こえ尽くすべき。年経たまへらむ春秋の暮らしがたさなども、誰にかは愁へたまはむとすらもなくおほゆるも、かつはあやしうなむ」など聞こえたまへば、…。(②三五頁)

須磨流離を終え、十年ぶりの思わぬ再会に、光源氏は言葉尽くして末摘花と共感しようとする。光源氏と末摘花は長年辛苦を共にした共感体とされているが、この「春秋の暮らしがたさ」の箇所『細流抄』が、「上陽人の心あり源の自称して我身ならてはたのみ給人もあるましきと也うちむきての給也」⁸と注し、「春往秋來不記年」との共通点を指摘する。当該白詩の享受史の中には、「春秋」の語に注視するものがあり⁹、妥当性のある注記である。また、この箇所に関しては、新聞一美氏の指摘がある。氏は末摘花造型に関して、「その徹頭徹尾時代遅れの様子はやはり、「上陽白髮人」の「小頭…時世粧」という人に笑われそうな時代遅れの様子に想を得ているのであろう。」¹⁰と示唆された上で、「蓬生」巻に強吏の横暴を嘆く「重賦」の引用を詳述されている。本稿では、なお、上陽人の生が、末摘花物語全般の構想に影響するものと考え、物語に胚胎する諷諭の精神を探る。

それでは、次に「上陽白髮人」と末摘花との類似点を見ておきたい。

二、末摘花の閨怨歌と「上陽白髮人」引用

末摘花と上陽人にはどのような共通項があるのか。末摘花は故常陸宮への思慕と前時代の「古代」的な生活文化や儀礼への執心を見せており¹¹、老いた上陽人の装いと共通点がある。最も顕著に表れるのは、光源氏をあきれさせた一連の「唐衣」詠である¹²。

A、(末摘花) からも君が心のつられければたとはかくぞそぼちつ

つのみ

〔末摘花〕①二九九頁

B、(末摘花) きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして

(源氏) かへさむといふにつけてもかたしきの夜の衣を思ひこそや

れ

〔玉鬘〕③一三七〜一四〇頁

C、(末摘花) わが身こそうらみられけれ唐衣君がたもになれずと思へば

(源氏) 唐衣またからころもからころもかへすがへすもからころも

なる

〔行幸〕③二一五頁

後注に示したように、これら三首の末摘花詠はいずれも引歌を持つ¹³、ひとえに光源氏の訪れの無い空闊を怨むものである。光源氏は、二条東院に末摘花を引き取った後も、体面ばかりを重んじて訪問せず、末摘花のもとには、六条院の華やかな生活や玉鬘の裳着の噂ばかりが届く。二条東院の末摘花や空蟬に関しては、次のように紹介されていた。

まして東の院に離れたまへる御方々は、年月にそへて、つれづれの数のみまされど、世のうき目見えぬ山路に思ひなずらへて、つれなき人の御心をば、何とかは見たてまつりとがめん。そのほかの心もとなくさびしきこと、はた、なければ、…(〔初音〕③一五二〜一五三頁)

末摘花は、六条院から離れた地で憂愁を抱え、紫の上を羨む女君の代表とされる。島内景二氏は、中世の妬婦譚の隆盛や『花鳥風月』などの中世の末摘花像の解釈から逆照射する方法で、「二条東院における末摘花の精神生活は、嫉妬と怨恨に満ちた不幸なものであった可能性もある」と分析されている¹⁴。また、こうした境遇は、楊貴妃に疎まれ、上陽宮に幽閉された上陽人の辛苦の境遇を踏まえているだろう。また、天宝年中の装いで再登場した老女は、「外人」の失笑の対照とされている。末摘花の場合、〔蓬生〕巻において、光源氏を一途に待つ姿勢が再評価されて二条

東院に迎えられたものの、「初音」巻では、光源氏には怨歌を、玉鬘の装着には時代錯誤の青鈍の装束を贈って、光源氏だけではなく、紫の上や玉鬘らの目にその愚かさが晒されており、再度、烏髯者の位置に格下げされている。古代の装束への執着、閨怨の情、そしてそれを笑う周辺人物の存在もまた、白詩との共通点である。二条東院転居後の末摘花の造型は、「上陽白髮人」や「長門賦」(『文選』巻十六)などに代表される諷諭詩、閨怨詩の影響下に位置付けることができる。

『うつほ物語』でも、二条東院の末摘花達のように、別邸に置かれた妻妾達の物語が展開する。「蔵開・中」巻では、藤原兼雅の一条殿に、俊蔭女の登場以後、寵愛を失った五人の妻妾達が、肩を寄せ合って暮らす姿がある。兼雅の子息仲忠は、その待遇改善をはかるべく父に代わって訪問し、妻妾主従からの人物評にさらされる。

(a) 主どもは、「あなかまや。かくめでたき子持ちたらむ人(俊蔭女)をば、いかが疎かにはし給はむ。すべて、宿世の尽きたればこそあらめ」とて、うち泣き給ふもあり、見愛で給ふもあり。

(「蔵開・中」五六三頁)

(b) 人々の言ふやう、「わが君をわびさせ奉る盗人の輩は、あだの戯れに戯れて、妬媚の誦経文捧げ持ちて、惑ひ来るぞ」 (同右頁)

(a) は兼雅の妻妾達の、(b) はその女房達の述懐である。一見して明らかかな仲忠の美質と器量に、妻妾達は寵愛を独り占めしている俊蔭女の幸福の道理を思い知り、我が身の「宿世」の拙さを比較して諦念を抱く。一方、女房達は女主人に代わって罵詈雑言を吐く。主従間の、寵姫に対する妬心とその認識、見解には齟齬がある。女主人の閨房事情は女房達の生活や経済状態に直結するため、とりわけ寵姫に対する恨みを深めるのは、周辺侍女達である。

「蓬生」巻の故常陸宮邸内部でも、現実的な女房達の金策に耳を貸さず、古宮邸や庭園の木立を死守する末摘花に対して、女房達からはあからさま

な批判の言及があった(②三四四頁)。光源氏との再会場面でも、女房達は、末摘花が忌避する叔母から贈られた衣装を着せて対面のお膳立てをはかる。末摘花の生活空間は、こうした周辺女房達の思惑と調整によって形成されている。当然、二条東院に引き取られた後の末摘花周辺にも、このような女房達の、六条院に住む寵姫たちへの怨念が渦巻く環境が形成されている。

また、『うつほ物語』の藤原兼雅の妻妾達の中で、「財の王」と呼ばれ、経済的不安のない人物として嵯峨院皇女・女三の宮がいる。彼女は梨壺の女御の母であり、兼雅から再縁と召喚の意向を打診された折、次の和歌を詠み贈った。

恨みけむほどは知られで唐衣袂濡れわたる年ぞ経にける

(「蔵開・中」五六五頁)

女三の宮は「恨み」唐衣「袂」の定型表現を使って長年の空闊をなじる。経済観念を離れているが故、その個人的な不信の念は深い。光源氏の場合には、末摘花の「唐衣」詠に対して、「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかごとこそ離れねな。」(「初音」③二三八頁)と酷評したが、定型表現には、感情表現を生々しく露呈しない効果があり、儀礼的な要素が強い。女三の宮は定型的な和歌の内に、内面の鬱屈を納めて兼雅に贈る。女三の宮の境遇は、末摘花の境遇にも似るが、女三の宮の和歌には、夫兼雅に対してあからさまな儀礼歌を贈り、心を隔てる要素が強く、一方、末摘花の場合は定型句の乱用とパターン化の要素が強い。

一方、上陽人と末摘花では相違点も多い。両者の相違点は何といってもその美醜の落差である。上陽人はその美貌ゆえに楊貴妃に幽閉され、末摘花はその醜貌のため、当初より光源氏に敬遠された¹⁵。更に、末摘花の場合には後や正室としての器量も劣っており、あるのは当人の自意識ばかりである¹⁶。かつて「蓬生」巻では時勢にも動かぬ不変の心根が、光源氏によって再評価された。古宮家の姫君として一定の評価を得ながらも、二条東

院転居後、再度その誇りゆえにも笑いの種になる昔気質な姿には、やはり「少亦苦老亦苦。少苦老苦両如何。」と、若年期も老年期も労苦を重ねた、宮女の女性苦を主題とする「上陽白髮人」の引詩関係の強さが認められよう。

末摘花物語における「上陽白髮人」引用は、美醜に関わらず女君が抱く怨情の深さを如実に語る。それでは、白詩引用によって、物語における末摘花はどのような位置付けがされているのであろうか。

上陽人は、若い時も老いて後も、苦汁をなめたが、末摘花にも宮家の既婚女性の人生苦が見える。「末摘花」巻において、零落した「律の門の女」として登場し、「蓬生」巻の故常陸宮邸では「待つ女」として登場、困窮と死、及び受領階級の叔母や侍女達、また蓬生などの自然による責め苦の時空が広がる。光源氏との再会によって一旦は再生を果たしたものの、その後、二条東院の中において、失寵の女君として二度目の人生苦を味わうのである。

「待つ女」から「恨む女」へ――末摘花の後半生は、光源氏との関係を軸に女性苦を体現したものとなっている。また、上陽人の辛苦が末摘花に投影されるとすれば、玄宗皇帝は光源氏に、上陽人を陥れた楊貴妃は、紫の上をはじめとする六条院の時めく女君達に相当する¹⁷。ここには疑似的な後宮の姿がある。末摘花という、空閨を託つ典型的な女君を描く意義の一つには、六条院体制の確立とその陰の部分語る意味がある。そして、この閨怨の問題は、第二部以降、光源氏が准太政天皇として社会的に絶対的な位置を確立する中、女三の宮降嫁によって六条院正室の座を追われ、内面の懊悩を深めた上、病を得て六条院を離れることになる、紫の上の主題へと展開していくのである。

おわりに

「蓬生」巻で光源氏に再会し、救出される末摘花の幸運な生は、後世、『無名草子』などにも取り上げられ、好意的に解釈されていた¹⁸。一方、中世御伽草子『花鳥風月』には、末摘花の亡霊が巫女に憑依し、光源氏の並み居る妻妾、愛人達に対する妬心を縷々吐き出す姿が語られる。

けんし、の給ふやうは、かの、いせのみやすところをこそ物かたりのおもひてにも、ねたみ心の、おはせしとて、うたてしきことには、申つれ

すゑつむ花の御事は、御物ねたましたりとも、かの物かたりには、見えぬものを、されは、何の御うらみにより、これまで、きたり給そや、はやく、御かへりけへ

いや、物かたりこそ、か、れぬとも、いまの世まで、すゑつむ花の名をもえたるに、見たりともなき、すかたとは、あらうらめしの、御ことのはや、いてく、すきたることなれとも、物ねたまして、くるはん…

(四二九頁¹⁹)

末摘花の亡霊はこの後、葵の上、紫の上、花散里、明石の君、六条御息所、女三の宮、藤壺・朧月夜、夕顔、玉鬘、空蟬尼君への嫉妬心を吐露する。内面の恨みを語る末摘花像は、これまで中世的人物解釈としてとらえられてきた²⁰。しかし、和歌に「うらみ」を表出してきた末摘花の内面の怨情とその造型には、「上陽白髮人」の「怨曠」が胚胎しているもの、と見ることができよう。空閨を怨む末摘花の和歌は、光源氏の寵愛を失った女君を代表し、寵姫への妬心の情は、読者によって共感され、それが後世の物語を産む土壌となるのである。

末摘花造型に関する様々な話型や古歌の同型表現の執拗な繰り返し²¹は、そこに、宮女の束縛から一步も出ず、空しく老化するほかなかった、上陽人の苦をも透視させる、一つの手法なのである。一方、話型や引詩の

パターンに象られていく末摘花像には、例えば昔物語の登場人物とは異なる造型をされてきた紫の上²²などは異なり、人物造型の限界も見える。

また、玉鬘十帖における二条東院の末摘花の閨怨歌は、光源氏の六条院体制の持つ暗部を照らし出していく。源氏庇護のもと、養女玉鬘を得て一層華やぐ六条院体制は、一方で、「蓬生」巻のような経済的な生活苦を離れた後、良好な環境を得てもなお続く女君の新たな苦を産む構造を持っている。末摘花の辛苦は、六条院の外部にありながら、内部の女君の生の危うさをも暗示している。六条院において光源氏が玉鬘求婚譚など華やかな非日常空間を演出し、若さを保ち続けるのに対し、別邸における老残の末摘花像は、日常空間で確実に進行する無常の時間軸を刻んでいく。

末摘花の最後の登場場面は「若菜上」巻である。

「東の院にもものする常陸の君の、日ごろわづらひて久しくなりにけるを、ものさわがしき紛れにとぶらはねば、いとほしくてなむ。昼などけざやかに渡らむも便なきを、夜の間に忍びてとなむ思ひはべる。人にもかくとも知らせじ」と聞こえたまひて、いといたく心化粧したまふを、例はさしも見えたまはぬあたりを、あやしと見たまひて、思ひあはせたまふこともあれど、姫宮の御事の後は、何ごとも、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす。

(④七九〜八〇頁)

光源氏は、長く病床にある末摘花の見舞いを装い、紫の上を離れて再縁した朧月夜のもとに通う。女三の宮降嫁を契機として紫の上と光源氏との間には隔心が生じており、やがて紫の上はもの思いを深めて発病し、六条院から二条院へと転居することになる。

「初音」巻に見られる末摘花の経年劣化の姿は、紫の上を中心に、玉鬘を迎えて若やぐ六条院体制にも必ず訪れる、「老い」と閨怨の主題を先取りし、実像をもって突きつけているのである。

【注】

- 1 『源氏物語』『和漢朗詠集』『大鏡』の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）に、『うつほ物語』は『うつほ物語全 改訂版』（おうふう 二〇〇一年）に、和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）による。
- 2 末摘花の白髪については民俗学的見地からその呪性が検討されている（嘉陽安之氏「初音巻の末摘花―滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目」を視点として―）（『人物で読む『源氏物語』第九巻―末摘花』勉強出版 二〇〇五年）。本文の「滝の淀みはづかしげなる」は、白髪をイメージさせている。白髪を滝に喩える和歌には、「おちたぎつたきのみなかみとしつもありおいにけらしなくろきすぢなし」（『古今和歌集』雑歌上 壬生忠岑 九二八番）、「烏羽玉のわがくろかみを年ふれば滝の糸とぞなりぬべらなる」（『貫之集』二〇〇番）、「君恋ふとみなかみ白くなる滝は老いの涙の積もるなるべし」（『うつほ物語』「祭の使」二二六頁）などがあり、また、白髪を「糸」に喩える白詩の例もある。
- 3 福田俊昭氏「『蓬生』の巻にみえる漢籍典拠の検討」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識36蓬生・関屋』至文堂 二〇〇四年）、藤原克己氏「源氏物語と白氏文集―末摘花巻の『重賦』の引用を手がかりに―」（『源氏物語と漢文学』和漢比較文学会編 一九九三年）ほか。また、末摘花の住環境には、皮衣や秘色の食器など、父宮在世時代の富貴を彷彿とさせる「唐物」が多く配置されている（河添房江氏「末摘花と唐物―唐櫛笥・秘色・黒貂の皮衣」『源氏物語時空論』東京大学出版会 二〇〇五年）。
- 4 原岡文字氏「末摘花考―霊性・呪性をめぐって―」（『源氏物語とその展開―交感・子ども・源氏絵』竹林舎 二〇一四年）ほか。
- 5 『白氏文集』の本文は太田次男・小林芳規著『神田本白氏文集の研究』（勉強社 一九八二年）により、便宜上、句点を付す。
- 6 西岡市祐氏「新楽府「上陽白髮人」の小序「愍怨曠也」について」（『國學院雑誌』第八十二卷第十二号 一九八一年十二月）

- 7 『源氏物語辞典』（北山谿太編 平凡社 一九五七年）による。岡部明日香氏は「蜻蛉」巻の「うとき人」にも引用関係を指摘する（『源氏物語蜻蛉巻の「上陽白髮人」引用について―幻巻からの物語内引用と併せて』『中古文学』第七八号 二〇〇六年十二月）。ほかに、『源氏物語』の「上陽白髮人」受容に関する先行研究としては、中西進氏「引喩と暗喩（二）―源氏物語における白氏文集、「上陽白髮人」など」（『日本研究（国際日本文化研究センター）』二号 一九九〇年三月）、余田充氏「幻巻と「上陽白髮人」」（『京都教育大学国文学会誌』一四号 一九七九年五月）、岡部明日香氏「楊貴妃と上陽白髮人―白居易新樂府の日本での解釈と受容について―」（『アジア遊学』二七号 二〇〇一年五月）、などがある。
- 8 本文は『源氏物語古注集成 第七卷』（一五一頁 桜楓社 一九八〇年）による。
- 9 先の『大鏡』の引用箇所のほか、『大式高遠集』二七三番にも、「春秋のゆきかへりぢもしらなくになにをしるしにとしをかぞへむ」（詞書「春往秋来不記年」、『新編国歌大観』角川書店）等とある。当集では、「長恨歌楽府」を主題とする二十首の中に、十首の「上陽白髮人」関係歌を載せており、両詩がともに享受されていたことが分かる。
- 10 「源氏物語の女性像と漢詩文―帚木三帖から末摘花・蓬生巻へ―」（『源氏物語と白居易の文学』二三八頁 和泉書院 二〇〇三年）
- 11 『源氏物語』中に「古代」の用例は十八例確認できるが、そのうち末摘花関係は五例を数え、皮衣の装束や衣箱（「末摘花」①二九三頁、二九九頁）、調度類（「蓬生」②三二八頁）、歌風（「玉鬢」③一三八頁）、装束贈答の儀礼（「行幸」③三一四頁）など、生活文化全般に父宮世代の遺風が残り、それを堅持することを生活信条としている。
- 12 末摘花の「唐衣」詠に、長谷川政春氏は「不変・不動」の意味や稚拙さを読み取られ（「末摘花―「唐衣」の女君―」『源氏物語講座』第二巻 勉誠社 一九九一年）、また、久富木原玲氏は反復による呪的空間のあり方を検討されている（「源氏物語と呪歌―末摘花・近江君の場合」『源氏物語 歌と呪性』若草書房 一九九七年）。
- 13 末摘花の詠歌A-Cの引歌は、次のようなものである。
- A、「いつかわれなみだのつきむからころもきみがこころのつらきかざりは」（『元真集』三一一番）
- B、「つれなきをおもひわひてはからころも かへすにつけてうらみつるかな」（『為信集』『桂宮本叢書 第二十巻 御集』一九二頁 養徳社 一九六一年）
- 「いとせめてこひしき時はむば玉よるの衣を返してぞきる」（『古今和歌集』恋歌二 五五四番「題知らず」小野小町）
- C、「中中に思ひかけては唐衣身になれぬをぞうらむべらなる」（『後撰和歌集』恋四 八四八番「女につかはしける」よみ人しらず）
- 14 「嫉妬する末摘花」（『國文學』第三八巻第一号 一九九三年十月）。
- 15 ここで類出するのは「側目」という語である。上陽人の場合、楊貴妃に疎まれる意で用いられる「側目」は、末摘花の場合は、光源氏の視線で幾度も確かめられ、敬遠される醜い横顔の描写へと転化されている（「口おほひの側目より、なほかの末摘花、いとにほひやかにさし出でたり。見苦しのわざと思さる。」（「末摘花」①三〇四頁）、「ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬと見えたまふ御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし。」（「蓬生」②三三六頁）、「まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などをいとほしと思せば、まほにも向かひたまはず。」（「初音」③一五三頁）など）。
- 16 「行幸」巻で、末摘花は玉鬢の装着に青鈍の衣装を贈るなど、正妻格の女君としての儀礼を欠かさない（③三一三―三一四頁）。
- 17 「幻」巻の紫の上の哀傷場面には「長恨歌」が引用され（④五四三頁、五四五頁）、紫の上の存在が楊貴妃に匹敵することが分かる。「長恨歌」の引用は、桐壺更衣や葵の上、紫の上など、物語の主軸をなす女君に使

用され、寵姫の傍らで空閨に悩む女君には、上陽人の像が重ねられる。

18 『無名草子』では、末摘花が「好もし」き人物に挙げられ、受領階級の叔母にも従わず、死ぬほどの思いをしながら古宮邸を守りぬき、光源氏と再会できた運命を、「仏にならむよりもありがたき宿世」（一九三頁『新編日本古典文学全集』小学館）と称賛する。

19 本文は『室町時代物語大成 第三』（角川書店 一九七五年）による。

20 前掲注（14） 島内景二氏論に同じ。ほかに、金賢貞氏『花鳥風月』における末摘花像について（『岡大國文論稿』二九号 二〇〇一年三月）などがある。

21 拙稿「蓬生」巻・末摘花の時間意識と光源氏―再会場面における年中行事表現から―（『國學院雑誌』第一一四卷第二号 二〇一三年二月）参照。

22 「若菜下」巻の紫の上は、昔物語中の登場人物と我身を比較するが、同じ境遇の人物は見つけられない。

対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて聞きたまふ。かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな、など思ひつづけて、夜更けて大殿籠りぬる暁方より、御胸をなやみたまふ。
(④(二二二頁))

『源氏物語』は、末摘花造型には徹底した話型を用いて昔物語をもどき、一方、紫の上造型には前例のない、「もの思ひ」を抱えた人物像を創造しているのである。

